

NO. 44  
March '08

# Newsletter

神戸女学院大学  
女性学  
インスティテュート

女性学講演会

## 「デートDVとは何か？」

### —女子学生に身近な人権問題—

亀井明子

「これから僕の言うことを聞いてくれたら荒っぽいことはしないからね」という彼の言葉に込められた意味を考える人は意外に少ない。この言葉を「彼の言うことを聞かなかった私が悪い」「わがままな私」と受け取ったり感じたりしています。また自分自身と彼との間にはないものとして考えていることもあり、恋人同士が陥りやすいところです。

デートDVとDVの違いについて見てみると、DV(ドメスティック・バイオレンス)とは、親密な関係にあるパートナーの間で起こる暴力、夫・恋人からの暴力と言われています。夫婦喧嘩と言われてきたように個人間の問題で起こっていると考えられてきましたが単純にそうとは言えません。社会的に立場の強い人(男性の持つ社会的権力・経済力)から弱い人(女性の経済力は男性の約60%)へ暴力を振るうことであり、体力はもちろんのこと社会的立場の強い男性から受けることが多いのは事実です。また暴力は婚姻関係のあるパートナーの間にだけ起こるものではありません。婚姻関係のない恋人同士の間にも起こっているのです。これをデートDVといいます。

2006年4月内閣府男女共同参画局調査『男女間における暴力に関する調査報告書』では10歳代から20歳代の20年間の被害体験(身体的暴行・心理的攻撃・性的強要をひとつでも受けたことがある)が女22.8%、男10.8%という結果があります。これは5人に1人が恋人からの暴力に遭遇しているということです。配偶者間DV(これまでの経験と聞いている)は3人に1人の割合で起こっているという調査結果がありますから、デートDV被害者と配偶者間DVの被害者の割合には大した差がないことがわかります。「性的強要」という項目に限って見てみると10歳代女では6.2%(16人に1人)・20歳代女では2.8%がデート・レイプの被害に遭っていることがわかります。また裸の写真を撮ったり、避妊に協力しないなどの暴力もあります。

被害を受けた学生をサポートする中でいくつかの共通項に気づきます。よく言われる共通する被害者タイプではなく、暴力が進む過程です。暴力は一定のステップを経過して徐々に身体的あるいは性的暴力へ進

んでいるように見えます。

ステップ1では、待ち合わせの時間を守ることや自分以外の男と話さないこと、自分以外の男の連絡先を携帯電話に登録しないこと等を約束させられます。ステップ2ではどこで誰と何をしているのかを明確にしておくことや無断で出歩かないことまた携帯メールのチェックなど行動の拘束が始まります。ステップ3では性的関係の強要があり、応じないと身体的暴力が伴うことも珍しいことではありません。最初のころは、自分が彼に愛されているから束縛されるのだと思う人が多く、他の男性との関係を遮断されるのも嫉妬心からだと思っています。しかし仮に嫉妬からであっても暴力行為を愛とイコールで結ぶことはできません。

このようにデートDVであるかどうか判断することが難しいことがあります。そのような時にはためらわず誰かに相談してみることも大切です。そして多くの情報を得ることによって暴力の問題に気づいていくことに繋がります。どんな理由があるにせよ、無いにせよこの世に暴力を受けてもいい人など誰もいません。

「配偶者からの暴力の防止と被害者の保護に関する法律」が施行され、数度の改正を経て被害者は配偶者間の枠組みを出ることはありませんでした。法律の適用外に置かれた恋人間DVは未だ認知されることも少なく、それだけに発見も遅れ救済措置も取られない状況です。多くの人にデートDVの実態を知ってもらうことから始めていきたいと考えています。

(スクール・セクシュアル・ハラスメント防止  
全国ネットワーク代表)

## 学外講演会で講演を行なって

【第1回：2007年10月27日】……………金田知子

### ●「アフリカの精神障害者と家族

#### —精神障害とともに生きる女性の語りより—

今回の講演では、ナイジェリアとシエラレオネというアフリカの二つの国における精神医療の実態を説明した上で、統合失調症という病を持ちつつ暮らす現地の女性たちの体験を紹介した。

一般的に統合失調症は100人から120人に1人が一生のうちいずれかの時点で発生する精神疾患だといわれている。単純計算すると、日本には100万人ほどの統合失調症患者が顕在的あるいは潜在的にいることにな

り、日本とほぼ同じ人口を抱えるナイジェリアでも同規模の統合失調症患者の存在が推定できる。しかし、日本にはおよそ1万人の精神科医がいるといわれているが、ナイジェリアには100名程度、人口規模が500万人のシエラレオネにはたった1人しか精神科医がいない。ナイジェリアやシエラレオネを含むアフリカ諸国の医療現場では、マラリアやエイズのような感染症の対策には積極的な取り組みがなされているが、精神疾患のような「死にいたることが少ない病」に対する関心は極めて低い。さらにナイジェリアやシエラレオネでは、精神病は禁忌の対象であり、根強い差別や偏見が精神病患者の生活のしづらさを増大させている。

しかしながら、このような状況においても、演者が現地でもインタビューした女性たちは強かった。さまざまな現実を受容し、自分が有する資源を最大限活用しつつ、日々の生活を営む彼女たちには、発展途上国出身者、女性、障害者といった弱者のラベリングは相応しくない。将来への希望と夢を失わず、自分たちができることを模索して肯定的に人生を歩んでいる姿にまさしくレジリエンス（障害回復力）の体現を実感した。今回の講演を通して、出席者の方々が日本から遠く離れたアフリカの国々に少しでも興味をもっていただければ幸いである。（文学部准教授：社会福祉学）

【第2回：2007年11月21日】……………高岡素子

### ●「飽食の時代に何を食えばいいのか

#### —女性のための食品学—

11月21日、女性学インスティテュート学外講演会を担当し、「飽食の時代に何を食えばいいのか。女性のための食品学」と題して、講演を行いました。

近年、我が国においては肥満や肥満が原因で引き起こされるメタボリックシンドロームが大きな社会問題となっています。食べ物に不自由することがなくなった飽食の時代に、食べることはどういうことなのか、また私たちは何を食えば健康的で充実した毎日が送れるのか、と言うことについて論じました。ただ、何をどれだけ食べればいいのかというような栄養学的な視点で考察するのではなく、食べ物に含まれる栄養成分の化学構造や、おいしさとは何か、どのようにして感じるのかなどについて科学的知識や分析を交えながら、食品学の見地から講義を行いました。

聴講生の大部分は女性で、多くの方が家庭の中で食を担っていらっしゃると思われる年齢層でした。講演後の質疑応答においても、活発に質問やご意見をいただき、講演した私にとっても大きな刺激となりました。

（人間科学部准教授：食品科学）

## 「摂食障害」の変容

生野 照子

「摂食障害」という病気概念や状況は、これまでにずいぶん変わってきた。疾患自体は古代からあったとされるが、現代までに変化の一路を辿ってきたといえるであろう。そうした意味において、この疾患はまさに時代を反映する病態である。

私が初見したときには「思春期やせ症」という病名であった。“食べ物を拒否し、ガリガリに痩せていく若い女の子の病気である。その主原因は育ちや母子関係であり、上流家庭に現れやすい”と、文献には記載されていた。ところが、“ときには過食や嘔吐するケースがある”ということが言われはじめ、過食症と拒食症を含めて「神経性食思異常症」と呼ばれるようになった。そのうち「両者は同一の疾患である」と見なされるようになり、「摂食障害」という病名が普及するようになったのである。

そうするうちに過食症が先進国などで急激に増加するようになり、またたく間に拒食症を追い抜いていった。同時に発症の低年齢化がみられ、筆者が携わっていた小児科外来にも受診者が訪れるようになったという次第である。

そして現在、ふたたび変容のきざしが見え始めている。2002年あたりから、“摂食障害とくに過食症の増加は軽減あるいは減少傾向にある”という海外文献を散見するようになった（ただしアジアでは依然として増加傾向にあると指摘されている）。

しかし摂食障害が全般的に減っているのかというとそうでもなく、診断基準に新しく加わった「むちゃ食い障害」という病態が増加している由。この障害は“過食するが嘔吐などの排出行為がない”という病態であり、結果的に肥満につながりやすい病気である。

さて、このような状況に対して私見を述べると、将来的には「摂食障害」という概念が大きく変化し、やせから肥満に及ぶスペクトルとして位置づけられるのではないだろうかと思える。つまり、体型にこだわる障害のような病態として組み換えられるような気がする。そうなると、現在多数いるとされる予備軍も、何らかの対応を要する状態として考えられるようになるかもしれない。女子大にとっては、無視できない事態かもしれない。（人間科学部教授：心身医学）

## Hillary Clinton の涙

松 縄 順 子

この冬休みは米国サンフランシスコの郊外ベルベデールで過ごした。米国大統領選の各党の候補者指名予備選挙と党員集会が始まる時期に当たり、その熱気を肌で感じ、「新年会」に集まった40人程のインテリ層の立候補者への飾らぬコメントを聞く機会を持つことが出来た。

今回の関心事は民主党のHillary ClintonとBarack Obamaの対決であることは言うまでもない。当地のマスコミの報道ぶり、人々の関心の深さに驚かされた。絶え間なく報道される両者を見ると、二人とも実に魅力的である。知的、卓越した話法、容姿端麗、国民の心を掴むコミュニケーション能力、帝王学を身に就けた貫禄、まさに「スーパースター」である。両者共「現実重視」で米国に「変革」をもたらすと公言し、米国民に指導者としての資質はあると認識されている。日本で報道されている単に「女性か黒人か」の話題性に重点が置かれた恰もお祭り騒ぎのイベントとは少々異なる感触を得た。

驚いたのはHillary Clintonの人気の無さであった。女性で余りにも能力があり、実績がある為に同性間にも反発を買うのが垣間みられたことだ。それがIowa党員集会の負けに繋がったのか。しかし5日後のNew Hampshire予備選挙では予想を覆し大勝を勝ち得た。予備選挙前日の女性同士の話し合いで、“Who dose your hair?”という支持者からの日常生活に関する質問に思わず涙ぐみ、全米に大ニュースとして報道された。「初めてセンチメンタルな感情を見せた。女性らしい！」New Hampshireでの彼女の逆転勝利の理由がその様に解釈された。女性はやはり弱い性として存在すべきなのか？

帰国すると、1月10日付New York Timesに米大手世論調査会社ピューリサーチセンターが寄稿していた。Clintonの涙をこらえる姿に同情票が集まったとの見方に「大差の理由を埋める説明は出来ない」と分析し、出口調査では低所得、低学歴の白人層が彼女を支持し、「こうした層は事前の世論調査に回答せず、黒人に好意的ではない」と指摘していた。

まさに性別や人種を越えて誰にでも成功のチャンスを与える「アメリカンドリーム」を両候補者が体現しようとしている故に、今回の選挙に米国民が胸を躍らせているのであろう。(文学部特任教授：通訳学)

## 2007年度後期活動報告

## I 講演会・セミナー等

[前期開講分については前号を参照のこと]

## 学外講演会

会場：西宮市大学交流センター

<第1回> 2007年10月27日(土)

「アフリカの精神障害者と家族

— 精神障害とともに生きる女性の語りより —

講師：金田知子氏

(神戸女学院大学文学部准教授：社会福祉学)

<第2回> 2007年11月21日(水)

「飽食の時代に何を食べればいいのか

— 女性のための食品学 —

講師：高岡素子氏

(神戸女学院大学人間科学部准教授：食品科学)



金田知子氏

高岡素子氏

## 女性学講演会

テーマ：「恋人からの暴力、

キャンパスセクハラを考える」

会場：神戸女学院大学 LA1-21

<第1回> 2007年11月30日(金)

「デートDVとは何か？

— 女子学生に身近な人権問題 —

講師：亀井明子氏

(スクール・セクシュアル・ハラスメント防止  
全国ネットワーク代表)

<第2回> 2008年1月11日(金)

「デートDV、キャンパスセクハラをめぐる裁判

— 被害者の権利回復 —

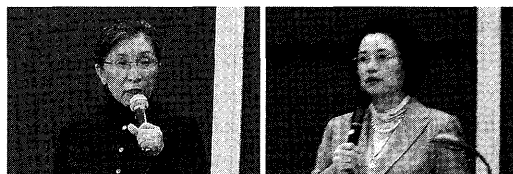
講師：段林和江氏(弁護士)

## II 研究助成

「第一次大戦文学と女性：東欧、ドイツ、英国」

平井雅子(文学部教授)

2007年10月24日急逝されたため、取消となる。



亀井明子氏

段林和江氏

## III 学会等出張補助 (国内・海外)

「大学付設女性学・ジェンダー研究所・センターネットワーク」第2回会合に出席  
(日本学術会議：2008年1月12日)

米田眞澄 (文学部准教授)

## IV 授業 Cu134(1)(2)「女性学(実践編)」

Cu234(1)(2)「女性学(理論編)」

Cu134(1)(2)「女性学(実践編)」、Cu234(1)(2)「女性学(理論編)」[主題コース]として前期後期とも本学にて開講した。

## V 学生懸賞論文(「女性学インスティチュート賞」)

2007年度(第9回)は4編の応募があり、選考結果は以下の通り。

<優秀賞> (1編)：賞金2万円(賞状)

藤本梨沙氏(神戸女学院大学文学研究科2年)

表彰は2007年10月19日神戸女学院講堂において学院の各種記念授与式とあわせて行なわれた。

## VI 出版物

『女性学評論』第22号 (2008年3月発行)

「ニュースレター」No.43 (2007年10月発行)

「ニュースレター」No.44 (2008年3月発行)

## — 2008年度(第10回)学生懸賞論文募集 —

賞の名称は「女性学インスティチュート賞」。対象は本学学生(学部生・大学院生)及び2007年度の本学卒業生・修了生が執筆した女性学、ジェンダー・スタディーズに関連する領域の論文。最優秀賞論文(1編)には賞金5万円及び賞状、優秀賞論文(2編)には各2万円の賞金及び賞状が授与される。また最優秀賞論文については『女性学評論』第23号(2009年3月発行予定)に全文が掲載される。締切は2008年7月22日(火)。選考結果の発表及び表彰は2008年10月中旬の予定。詳細は当インスティチュートまで。

## — 2008年度前期講演会等のご案内 —

## ■特別講演会

日程：2008年5月30日(金) 10:35~11:25

会場：神戸女学院講堂

講師：生野照子氏(神戸女学院大学名誉教授)

演題：「女性と『食の病』」

<申し込み：不要、受講無料>

## ■連続セミナー「女性における食と健康」

日程：2008年6月20日~7月11日、

14:00~15:30(全4回)

会場：神戸女学院大学 JD-104教室

<第1回> 2008年6月20日(金)

「呼吸から診る女性の健康」

講師：下内章人氏(国立循環器病センター研究所  
病因部臨床病理研究室教授)

<第2回> 2008年6月27日(金)

「匠の技と調理科学との出会い~食品企業での仕事」

講師：笠松千夏氏(味の素株式会社 食品カンパニー 加工食品開発・工業化センター 専任課長)

<第3回> 2008年7月4日(金)

「性差と性差医療」

講師：西田昌司氏

(神戸女学院大学人間科学部教授)

<第4回> 2008年7月11日(金)

「食べ物に対する身体の応答性について」

講師：高岡素子氏

(神戸女学院大学人間科学部准教授)

定員：40名 \* 3回以上の出席者には修了証を発行

<申し込み：要、受講無料>

女性学インスティチュート  
インターディシプリナリー・プログラム

「女性学インスティチュート インターディシプリナリー・プログラム」は、学生における「女性学、ジェンダー・スタディーズ」の認識を高めることを目的とし、本学で開講される科目のうち、女性学やジェンダーの視点を取り入れたものを在学期間中に「女性学(理論編)」、「女性学(実践編)」を含む10単位以上を取得した学生に、「プログラム」修了証を交付する制度です。

修了証を希望する学生は、必要単位の履修を証する書類(成績表等)を女性学インスティチュートに提出しますと、学期末に修了証が授与されます。なお、各年度において該当する科目は、年度初めに告知します。

## 高橋友子ディレクター逝去のお知らせ

高橋友子ディレクターが2007年10月31日、任期半ばにて急逝されました。2004年度より2期にわたり、ディレクターを務められ、女性学インスティチュートの活動・発展に多大なご尽力を頂きました。

ここに謹んで、天上の平安をお祈り申し上げます。

後任に、渡部充文学部総合文化学科准教授が就任、任期は2010年3月31日まで。

## 2007年度女性学インスティチュート編集委員

金田知子、三浦欽也、渡部 充(委員長)、山本義和  
(ABC順) 編集事務：溝口芳子

編集・発行：神戸女学院大学女性学インスティチュート

〒662-8505 西宮市岡田山4-1 TEL/FAX:(0798)51-8545

URL <http://www.kobe-c.ac.jp/gender/>